

# <写真とエッセー「現代の海女」>出版 「日本の財産そのもの」 鳥羽の中国人ホテルマン、李さん / 三重

2015年4月21日(火)12:24

毎日新聞

◇「潮騒」ロケ地巡りで関心

伊勢志摩の海女に魅せられた鳥羽市安楽島町の中国人ホテルマン、李相海(りしゃんはい)さん(43)が、写真とエッセーでつづった「現代の海女」を出版した。写真集「伊勢志摩の自然と祭礼」に次いで2冊目の出版で、李さんは「不便な時代から続く海女漁は、私のような外国人から見れば日本の財産そのもの」と訴えている。【林一茂】

中国遼寧省で生まれた李さんは、大学を卒業後、教師を経て三重大人文学部に留学。卒業後、自動車部品メーカーで働き、2007年に鳥羽シーサイドホテルに入社した。

海女に興味を持つようになったのは08年秋、鳥羽市の離島・神島を舞台にした映画「潮騒」のロケ地巡りに参加したのがきっかけ。4作目の映画に主演した山口百恵さんは、李さんが小学生時代、「中国で知らない人はいない」ほどの有名人で、一気に神島の民俗行事や海女文化へと関心が広がった。

同島の海女の祭礼「ごくあげ」で初めて生業としての海女漁に触れたのを皮切りに、国崎町の「御潜(みかづき)神事」、菅島の「しろんご祭り」、志摩市の「潮かけ祭り」などを取材しカメラに収めた。岩手県久慈市の「北限の海女フェスティバル」にも出かけた。

本にしようと思いついたのは、昨年10月の海女撮影会で70代の2人の海女と遭遇したことから。李さんは「レンズを通して見る海女の顔には、歳月の痕跡が皺(しわ)として表れ、苦勞の人生を歩んできた(中国に残る)母(67)と重なって見えて、悲しくなった」と記す。その夜、素潜り漁だけで生きてきた海女を介し、便利になった現代の在り方を無性に問いたくなり、寸暇を惜しんでペンを走らせた。

2カ月で書き上げた「現代の海女」は、海女の祭り▽三世代海女を訪ねる▽海女小屋物語▽現役海女取材記▽漂泊に生きる海人▽消えつつある海女――の6章からなり、写真41枚を配した。李さんは「海女の文化を守っていくことは、変わりつつある海の環境と進化を求める人間たちの将来にかかわる問題でもある」と指摘する。

青山ライフ出版。1200円(税別)。

〔三重版〕